



バンキアン地区保育所 © 小林正典



認定NPO法人
幼い難民を考える会
CARING FOR YOUNG REFUGEES

2009年3月
NO.89

Children, Our Future

子どもたちの明日

目次

カンボジアで、一番教育が届かない地域で活動	2
バンキアン小学校校長先生インタビュー	4
卒園児の「今」 セム・ソリヤさん	5
インターン体験談	6
-国内活動報告- 大妻女子大学/工藤巖記念基金	7
～連載寄稿～ 「薬物問題」 フォトジャーナリスト 高橋智史さん	8

東京事務所が
移転しました!



幼い難民を考える会(CYR)は、難民となったカンボジアの子どもたちがけんめいに生きようとする姿に触発され、1980年に組織されました。子どもたちが心身ともに健全に成長し、その親たちが人間らしい生活環境のもとで自立できることが、難民を出さない平和な社会につながることを信じ、復興をめざすカンボジアで活動を続けています。

カンボジアで、 一番教育が届かない地域で活動

文：山極小枝子（カンボジア事務所保育担当）



ラタナキリ州公立幼稚園

ラタナキリ州での公立幼稚園研修

小学校に入った時に クメール語が分からない

1月7日、プノンペンから636km離れたラタナキリの州都バンルンを目指し、3泊4日の旅に出た。車でおよそ11時間。ラタナキリ州は、カンボジアの北東部に位置し、東はベトナム、北はラオス国境に接した丘陵地が広がる。人口密度は、首都プノンペンと比べて約1/300である。

CYRがこうした僻地へ支援を行うのは、今回で3回目になる。僻地の中でも幼児教育の支援が入っていない州を優先しているが、ラタナキリはその1つだ。ここには、先住民である少数民族が数多く暮らしている。このため、子どもたちは小学校に入った時にクメール語が分からないだけでなく、友だちと言葉が違うためにうまくコミュニ

ケーションをとることができない。小学校の就学率・識字率は、全国で最も低い。また、保護者自身が学校へ通わなかった家庭が多いため、教育に対する意識が低く、子どもが途中で学校を辞めてしまう率も全国で最も高くなっている。現在、全21ヶ所の公立幼稚園に666人の子どもが通っている。

夕方5時前にゲストハウスに到着。隣が明日からの研修会場だったので早速行ってみると、プノンペンから事前に送った教材が、確かに山と積まれてあった。研修には、公立幼稚園で働く22名の先生が参加する。教材は全部で11種類。先生たちに目的や使い方を説明し、幼稚園に持ち帰ってもらおう。先生と子どもと一緒に考えて、楽しく遊んでもらうことがねらいだ。

2日間、 みっちり学ぶ

初日。カンボジアでは欠かせないセレモニーがここでも同じように行われた。国歌斉唱、州からの報告、局長さんの挨拶、そしてCYRの挨拶……と続く。まずは会場の準備から。椅子や机を壁際に寄せ、空いたスペースにはゴザを敷きつめた。前日に慌てて買い求めたものだ。講師を務めるのは、CYRと仕事をして5年目になるカンダール州幼稚園局事務局長のサウ・チャンターさんと2名のアシスタント。CYRは補佐役を務めた。

研修は、布ボールから始まった。ボール遊びのねらい、布製であることの意味や年齢別の遊び方などを、グループで考えたり遊んだりしてもらうちに、最初は雰囲気



ボール作り



歌絵本の使い方を学ぶ



研修に参加した先生たちの集合写真



ボールの遊び方を体験

馴染めなかった先生たちも、とてもリラックスして参加していた。始めよければ…の言葉通り、全教材を2日間缶詰になって学ぶことができた。

ボール作りの作業中、先生たちは黙々と手を動かしていた。「教材を作りたい」という先生たちの要望に応じて、布、綿、針、糸、はさみを持ち込んだ。1人2～3個は出来上がり、色とりどりのボールに満足していた。製作途中の物は、家に持ち帰って続けてもらうことにし、後は復習に時間をかけた。

「幼稚園には、何もありません。」

この研修のために11kmの道のりをやって来たという先生は、「予算がなくて教材を作れないので、CYRからの教材は是非使

っていきたい。幼稚園に面白いことがあれば、子どもたちが休まなくなる」と言って嬉しそうに笑った。また、60km離れた村から土埃の道をバイクタクシーでやって来たという先生は、「幼稚園は古い事務所を使っていて、窓もなければ教材・遊具も何もない。今回の教材は、自分の家で保管し、使うときに幼稚園に運ぶことにする」と話してくれた。劣悪な環境の幼稚園に置いておけば、盗まれたりネズミにかじられたりするからだろう。こんなところからも厳しい現実が伺える。

子どもは『今』を
生きている。

今から1年後のフォロー研修について考える。点在する幼稚園のうち、何ヶ所

を見て回れるか気がかりだ。今までの経験から、1回りの研修で終わらせるのではなく、フォローのために再訪問することが大切だと感じている。これまでもフォロー研修を実施し、子どもが教材を理解して使っているか、教材はきちんと管理されているかなどを見せてもらいながら、より具体的なアドバイスをしてきた。教材を、配るだけで終わらせず、使えるようにサポートする責任があることを実感している。

僻地の公立幼稚園における教材支援の意味は大きい。たくさんの子どもが、日に日に大きく成長しているのだ。かけがえのない幼児期に待ったをかけることはできない。

CYRの保育所に通った子どもたちと、通わなかった子どもたちには、どのような違いが見られるのでしょうか？卒園児が通うバンキアン小学校のチョン・ソキム校長先生にインタビューしました。



チョン・ソキム校長先生

「昔は子どもを学校に行かせない家庭が多かった。
今は、大半が通わせたいと思っている」

私は1979年からこの学校で働き、村のことや子どもたちの様子をずっと見てきました。昔は子どもを学校に通わせない家庭がとても多かったです。でも今は、保護者の大半が子どもを学校で勉強させたいと思っているんです。それは、この30年の間に村の生活水準がだいぶ良くなってきたからだと思います。もちろん、働きながら学校に通っている生徒もたくさんいます。貧しいために学校を続けられない家庭の子もいます。先日も、魚や野菜などを売っている生徒を見かけました。そんな時には、校長として「生活のために商売も大切だけれど、勉強も忘れないで欲しい」と声をかけるようにしています。



バンキアン村の風景 © 小林正典



保育所の子どもたち © 小林正典

「卒園児は、クラスのリーダーになっている」

CYRの保育所に通った子どもたちと、そうでない子どもたちには、ずいぶん違いがありますね。例えば保育所を出た子どもたちは、先生を怖がらずに、授業中も手を挙げるなど積極的に参加します。だから先生たちも教えやすいですね。学校を休まないし、また休むときには保護者がちゃんと連絡をくれます。校則をきちんと守り、卒業するまで学校を辞めません。そんな子どもたちは、賢くて物覚えがいいので成績も優秀です。クラスのリーダーになることも多いですね。

「保護者の意識の違いもはっきり分かる」

それから保護者の意識にもずいぶん違いがあります。保育所卒園児の保護者は、子どもの勉強をていねいにフォローしていますよ。ここの学校では、月に1回「連絡帳」を書いてもらっているんですが、そこには子どもの性格や、成績、出席率などについて、保護者からのメッセージを書くページがあります。卒園児の保護者は、いつもここにたくさんのメッセージを書いています。この連絡帳を見ると、卒園児の保護者とそうでない保護者の違いがはっきりと分かるんです。

CYRスタッフが感じたこと

校長先生からは、卒園後も元気に成長している子どもたちや、それを支えている保護者の様子を聞くことができ嬉しかった。幼児教育は、数字や形では成果が表せないけれど、5歳までの幼い時期に保育所で過ごすという経験が、その後大きく影響をすることを改めて感じた。CYRが保育所を開いて17年。活動は、ゆっくりと確実に地域に根付いていた。

卒園児の「今」

CYRがカンボジアで保育所を開いてから17年。第一期卒園児は20歳を超えるようになりました。2002年、2004年に引き続き、3回目の卒園児調査を行いました。前回と比べて、中学就学率は1.4倍に、高校は5倍以上に増え、地域での教育に対する意識の変化が伺えます。

今回は、大きなニュースがありました。地方の高校就学率がわずか6.1%の中、大学に進学した卒園児がいたのです。貧困を抱え、高等教育まで受けるのがとても厳しい状況に置かれながら必死で勉強に励んでいる卒園児を、連載で紹介します。



セム・ソリヤさん(21)
1993年プレイタトウ保育所卒園

家族と仕事

父	稲作
母	稲作
姉(30)	主婦
兄(28)	大学生
姉(25)	主婦
本人(21)	バンダ大学1年
妹(13)	小学生

「寂しくても、
精一杯がんばらなくちゃ！」

大学に行きたいと両親に伝えた時、「学費が払えないからダメだ」と言われました。でもわたしは、せっかく高校を卒業したのに大学まで行かないともったいないと思いました。だから、反対する両親を何度も何度も説得しました。そしてやっと許しをもらうことができたんです。学費だけでも、年間で\$280(約29,400円)かかります。父と母は、大切な田んぼを売って支払ってくれました。(※1)

大学には今年の10月に入学したばかりです。だから、プノンベンに出て来てまだ1ヶ月しか経っていません。村での生活とは何もかも違ってきますね。地理が良く分からなくてとても不便だし、食事をするにもお金がかかります。何よりも、初めて家を出て家族と離れて暮らしているの、とても寂しいです。

今は、友だちと5人で共同生活をしています。家賃は\$60(約6,300円)。ごはんは当番制で作っています。時間があれば、これから自分でアルバイトを探して、なんとか学校を続けたいと思っています。この間、両親がわたしに会いに来てくれたんです！自分のことを「寂しくて可愛そうだけど、がんばってほしい」と励まして、学校へ通うための自転車を買ってくれました。だから精一杯がんばらなくちゃと思っています。

大学では、数学が好きなので会計を専攻しました。銀行など仕事を探しやすいと思ったからです。将来、もし地元で仕事があれば戻りたいけれど、多分、ないです。だから、今はプノンベンで働きたいと思っています。

(※1)カンボジアの公務員の平均月給は、約\$30

同居している友だちに
聞いてみました！

Q. ソリヤさんは、どんな人？

A. 余計なことは喋らずおとなしいけれど、とても強くてやさしい子です。



両親に買ってもらった自転車の前で。



「長期的なスパンで支援するのが大切」 松岡 奈々子 さん

カンボジア留学中にCYRカンボジア事務所でボランティアをしていました。自分の目で見
た活動が日本でどのように伝えられているのか、活動のための資金集めや啓蒙活動はど
のように行われているのか、それを知りたくて、今年度インターンシップに応募しました。

広報のインターンをさせていただくなかで、外部にCYRの活動報告等をする機会が多くあ
ったので、CYRの活動がどのようなねらいをもって運営され、そしてそれがどういった成果を
出しているのか、ということをつぶさに知ることができました。保育事業も織物事業も、今ま
での地道な活動が積み重なり、着実に成果を上げているのを見て、結果をあせらず長期
的なスパンで支援をすることも非常に大切なのだと実感しました。

4月からは企業に就職します。カンボジアや国際協力と直接関わることはなくなりますが、
今とは違った立場で国際協力に関わっていきたいと思います。



「充実した1年でした」 丸田 友紀 さん

国際協力への興味と、その実務を経験しながら社会勉
強がしたいと思い、インターンに応募しました。1年間のイ
ンターンでは主に織物販売に関わりました。織物製品の
納品のための一連の作業や、百貨店での販売、会社との
共同のイベント、「おりもの通信」発行、カンボジア語の翻

訳など、仕事の種類も場面も幅広く様々なことに関わらせてもらいました。

自分がこういう仕事をやりたいと言うと仕事を用意してくれ任せてもらえたことが嬉し
かったです。自分が関わる仕事からだけでなく、スタッフの方の仕事の進め方や、コミ
ュニケーションのとり方を間近に見ることで、刺激と学びの多い充実した1年になったと
思います。食事やお茶の時間は和気藹々とみんなが集まって話しができる時間で、
CYRのあたたかい雰囲気や良さが詰まっているなと感じました。

体験談

今年度は、インターン生
3名を受け入れました。



「国際協力は、現場だけではなかった」 仁平 志織 さん

CYRでお世話になった半年間は本当にあっという間でした。インターンを志望した動機は、
修士論文の調査と、NGOの事務局運営がどのように行われているのか体験してみたい、と
いう目的があったからです。スタッフの皆さん、ボランティアの皆さんの「考え」や「思い」に
触れる中で多くのことを学び、十分に目的を達成することができた、と感じています。

国際協力と聞くと、現地での活動が真っ先に思い浮かぶと思います。私自身、インターン
を始めるまではその印象を強く持っていました。ですが、実際に参加する中で、国際協力と
は、現地で頑張るスタッフと、それを支える日本事務局の働きがあってはじめて成り立つも
のであるということを、強く実感しました。

特に、多忙を極めるスタッフの支えになっているのが、ボランティアや会員であり、それなく
しては、CYRは成立しないのではないかと思います。

私自身も、今後は北海道から会員として、皆さんの活動を支援していきたいと考えています。

国内活動

-ありがとうございます-

CYRカンボジアの活動は、さまざまな日本での協力に支えられています。

学校



インターンを通じて 学生の心が豊かに

大妻女子大学
家政学部教授 金田 卓也 先生

大妻女子大学家政学部児童学科では保育園・幼稚園・小学校での実習だけではなく、子どもに関わる企業やNPOでのインターンシップという授業があります。現学長である大場幸夫先生の紹介でCYRには毎年インターンシップ学生の受け入れをお願いしています。海外の子どもたちのための活動というので、現地に行って子どもたちと関わるのできるのではと思っている学生もいるのですが、こうした発展途上国の子どものための支援活動は、募金集めやニュースレターの発行など地道な事務作業によって支えられていることを、まず理解してもらいたいと考えています。

CYRの事務所に通う中で学生たちは多くのことを学ぶことができます。カンボジアの現状を知るだけでなく、熱心なスタッフの皆さんと一緒に仕事をするのは、すてきな女性の生き方を知る機会にもなっています。

学生たちは大学に戻ってからも積極的に募金活動をするなどしています。このインターンシップがCYRの活動に少しでもお役に立つとともに、学生たちの心を豊かにしていることをたいへんうれしく思っています。



2009年度、短期インターン生

団体



10年続いた500円募金

工藤巖記念基金
運営委員長 藤川 智美 さん

工藤巖記念基金は、元岩手県知事の故工藤巖さんの「世界の飢餓状態にある子ども達を救いたい」という願いから始めた活動です。

平成10年、500円募金を行いました。頂いた募金の活用を検討している時、「幼い難民を考える会」の活動が、情報の中にありました。当時、CYRが4ヶ所の保育所を運営しており、ここに給食費を援助することから始めました。CYRの毎年の報告によりますと、子ども達の健康状態が、年々、回復しているのと同じ喜んでおります。



©小林正典

500円募金は、10年続けて行いました。この活動が広まって、カンボジアのために役立ててほしいと多くの援助が寄せられました。これらの支援で保育所や学校を建設することができました。外に教材の支援や、絵本や教科書の制作にも協力することができました。

10年を目途に始めた活動でしたので、ひとまず幕を降ろすことにしました。長い間のご協力に感謝を申し上げます。



一人、英語の勉強に励んでいるドラッグリハビリテーションセンターの青年

「薬物問題」

フォトジャーナリスト 高橋 智史 さん

「3階の部屋に住む社員が親のいない時に部屋で仲間を集めて麻薬を吸っているよ。このあたりは昔から麻薬の売人も多いしね」とスラムに隣接するアパートに住む男性は言った。「最近では若い年齢、高校生くらいの青年たちの間にも麻薬は広がっている。スラムに麻薬を買いに来た子を見たこともあ

るよ。政府や警察がもっと積極的に手をうたないと大変なことになると思う」と男性は話を続けた。

カンボジアでは近年、若者の間に麻薬や覚せい剤の使用が増えてきている。それらを使用する若者たちはごく普通の青年たちだ。プノンペンにあるドラッグリハビリテーションセンターには現在、69人の若者たちが、麻薬や覚せい剤の依存を絶つため、心身の健康を取り戻すためにリハビリを行っている。

19歳のトゥーイ・メンリアンさんは「僕はヘロインを使用していた。高校生の時に友人に勧められて好奇心から使うようになってしまった。あの時はヘロインの怖さをまったく知らなかった。使ってしまったからは中毒になってしまい、ヘロインを使わずにはいられなくなった。高校にも行くことができなくなり、母親がここに僕を連れてきてくれた」と話す。トゥーイさんはヘロインを売人から3ドルほどで少量ずつ購入していた。売人は用心深く、売買する場所をその都度変えるといわれている。カンボジアではタイやラオス国境から大量の麻薬が密輸される事件が何回か発覚している。売人の背後には大きなネットワークを持つ大がかりな組織が何重にもいると推測されており、その全貌は未だに不透明な状況だ。ドラッグリハビリテーションセンターの所長、ホン・チョウンさん(49)は「麻薬や覚せい剤は青年たちの健康を害するだけでなく、心をも破壊していきます。そして、家族の絆にも大きな負の影響を与えます。センターにいる青年の中には家族関係がうまくいかなかったり、勉強のストレスから、薬物に手を出してしまった子もいます。彼らの心のケアが本当に大切です」と話す。センターに入所している青年たちが着ているシャツの後ろには「私は両親を愛し、更生できるように頑張ります」という願いが書かれている。



高橋智史さん、プロフィール

フォトジャーナリスト。1981年10月6日生まれ、秋田県秋田市出身。高校卒業後、日本外国語専門学校国際ボランティア学科入学。その後、日大芸術学部写真学科で写真を学んだ。カンボジアを主に東ティモール、アフガニスタン、スマトラ沖地震津液被災地などのアジアの問題、人々の営み取材し雑誌、写真展などを通じて作品を発表。現在、プノンペンを拠点に取材活動を続けている。秋田魁新報社「素顔のカンボジア」でフォト&ストーリーを連載中。

CYRの活動をご支援ください

年会費 正会員 ¥10,000 学生会員 ¥3,000 団体会員 ¥30,000

下記の口座にご送金ください。

■ 郵便局 No.00110-8-36227 (特活)幼い難民を考える会

■ 銀行 三菱東京UFJ銀行六本木支店 (普)No.1351747 特定非営利活動法人 幼い難民を考える会

※CYRは認定NPO法人です。5,000円を超えるご寄付は寄付金控除の対象となります。



〒112-0013 東京都文京区音羽1-10-4 池田ビル3F
TEL: 03-3943-6971 FAX: 03-3943-6973
Email: info@cyr.or.jp URL: http://www.cyr.or.jp
※事務所を移転しました

子どもたちの明日89号
◆発行日:2009年3月5日
◆発行人:深水正勝